

コミュニケーション能力を育む小中一貫英語教育 ～9年間のカリキュラム作成を通して～

研究の要旨

本研究は、小中一貫教育における、小学校1年生から中学校3年までの9年間を通じた英語教育について理論研究を行い、児童生徒がコミュニケーションの素地、そして基礎を身につけるための系統的な指導計画を作成することを目的としたものである。

まず、英語教育の現在の状況を知ることから始めた。文部科学省が進めるグローバル化に対応した施策を押さえながら様々な文献を読み、理論研究を行った。さらに小中一貫校開校に向けて他校の視察や授業参観、研究授業、研究会などに参加した。このことを踏まえ、9年間を通して英語でコミュニケーションを図ろうとする素地と基礎を育むことを目指した指導計画を模索し、作成した。

今後も、授業実践をしながら修正を重ね、社会や制度の変化に対応できる柔軟性のあるカリキュラム編成を続けていきたい。

名護市立 屋我地中学校
教諭 知花 均

目 次

I	テーマ設定理由	27	
II	研究の全体構想図	28	
III	研究内容	29	
1.	コミュニケーション能力について		
(1)	英語科におけるコミュニケーション能力とは		
(2)	大まかな指導の流れ		
2.	小学校英語教育について		
(1)	なぜ小学校での英語教育が必要か？		
(2)	小学校外国語活動野の成果と課題		
(3)	教科型への移行について		
(4)	評価について		
3.	中学校英語教育について		
(1)	中学校外国語科の課題		
(2)	今後の方向性		
(3)	効果的な小中接続の方法について		
(4)	課題の解決を目指した取り組み例		
4.	ICT活用について		
(1)	ICT 機器活用の意義，必要性について		
(2)	英語科における ICT 活用の利点と実践事例		
5.	屋我地小中一貫教育校の「英語教育」に向けて		
(1)	本校の学校教育目標		
(2)	指導計画作成の基本方針		
(3)	9年間の英語の目標		
(4)	学年区分別のねらいと到達目標		
(5)	指導の重点		
(6)	指導の方針		
(7)	指導体制		
(8)	評価について		
(9)	指導計画		
	①英語科全体計画	②英語単元配列一覧表	③4領域における系統性
	④領域別指導の重点	⑤評価規準	⑥小学校英語活動年間指導計画一覧
IV	研究の成果と課題	51	
V	研究を振り返って	51	

<引用・参考文献>

コミュニケーション能力を育む小中一貫英語教育

～9年間のカリキュラム作成を通して～

名護市立 屋我地中学校 教諭 知花 均

I テーマ設定理由

グローバル化が急速に進展する社会において、英語は世界で最も多く使われている言語である。近隣諸国においては小学校からの早期英語教育がわが国よりも早く実施されており、英語力において我が国よりも上位である。(※図1)

その状況を改善すべく我が国でも様々な取り組みがなされてきた。文部科学省の『グローバル化に対応した英語教育改革実施計画』(2013)によれば平成32年度より、小学校高学年での外国語活動は教科となり、時数も増え、より専門性の高い学習内容が求められる。さらに中学年において外国語活動が必修となるなど、新たな取り組みが始まる。

平成28年度に、屋我地一小中貫教育校『ひるぎ学園』が開校を迎える。その柱の一つとなっているのが、小学校1年生からの英語教育である。小学校外国語活動指導要領にもあるように、基本的な音声や表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養うことを目標にした取り組みを行う。

低学年の特性を鑑みながら、中学校への円滑な移行を目指すという、名護市小中一貫教育推進市民懇話会からの提言(2014)を受け、各学年の特性、実態に合った指導内容を作成し、前期(小1～小4)、中期(小5～中1)、後期(中2～中3)と効果的な繋ぎが出来るような計画を作成する。

文部科学省(2013)『グローバル化に対応した英語教育改革実施計画』も示しているとおおり、グローバル社会における国際的な人材を育成するためには、まず、自分の地域を知り、その良さを他者に伝える力が求められる。単に英語で受け答えをするだけでなく、将来的には、自分の立場から意見を主張しつつ、相手の意見や立場を受け入れ、相互理解し、自国の人たちと他国の人たちとの橋渡しができる人材を育成したい。そのためにも9年間を通し、体験的・実践的な活動の中で英語のコミュニケーション能力を身につけさせたい。以上の理由から本テーマを設定した。

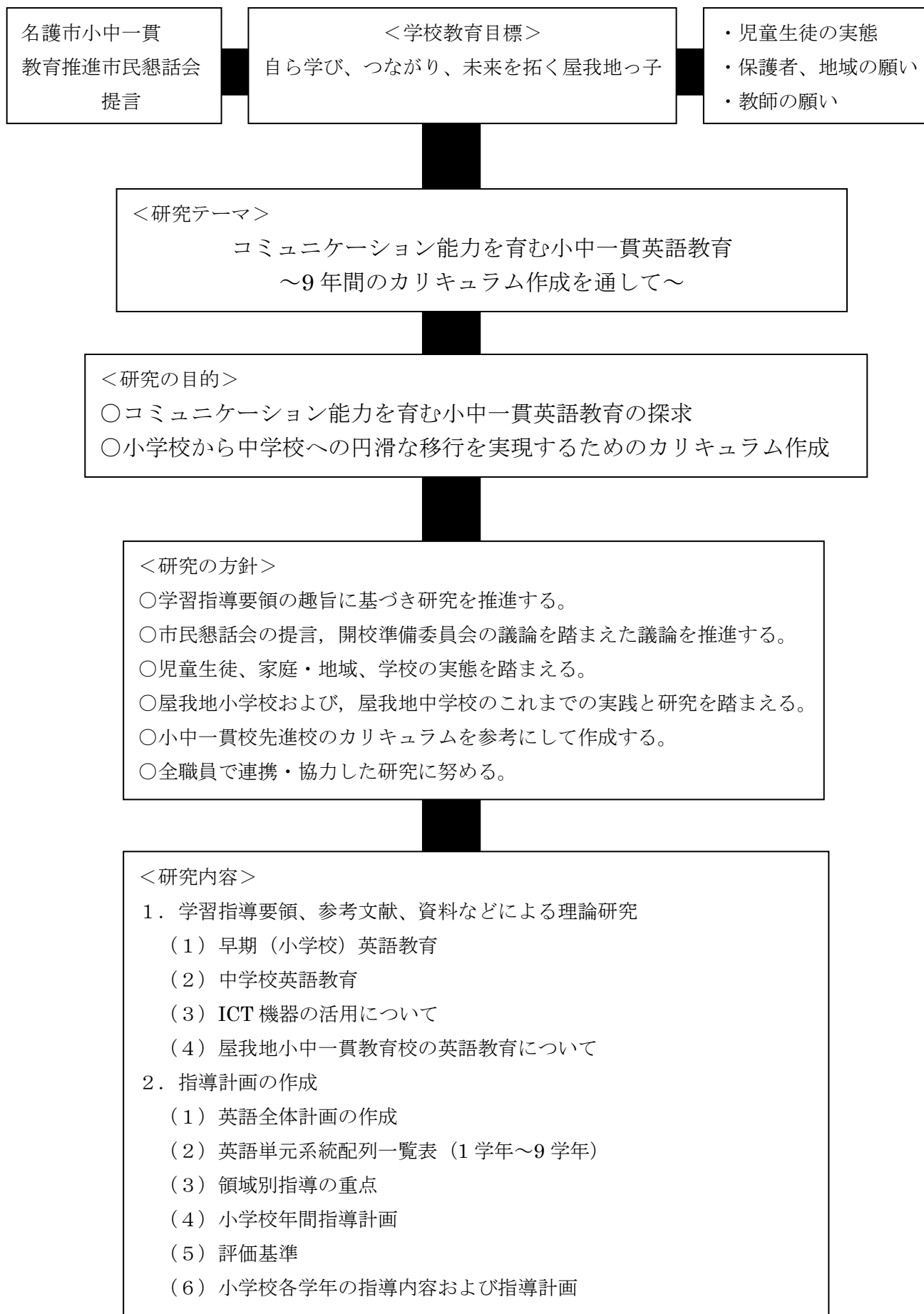
※図1

国名	開始年度	開始学年	週時数	※TOEFL順位
日本	2001年	小5	週1時間	28位
中国	2001年	小3	週4時間	16位
韓国	1990年代	小3	週2時間	10位
台湾	2001年	小5	最少週2時間	19位
タイ	1995年	小1	週6コマ(発展レベル)	21位

「アジア諸国における英語教育の取り組み」(文科省,2004)

TOEFL順位は2010年の結果(アジア38カ国中)

II 研究の全体構想図



III 研究内容

1 コミュニケーション能力について

小学校外国語活動の目標は「コミュニケーション能力の素地を養う」であり、中学校外国語科の目標は「コミュニケーション能力の基礎を養う」である。両者共に「コミュニケーション能力の育成」が大きな柱となっている。

(1) 英語科におけるコミュニケーション能力とは

「コミュニケーション能力」の一般的な意味は以下のような内容である。

＜基本の4つの力＞

○聴く力 ○説明する力（伝える力） ○質問する力 ○チームでの協調性

日本コミュニケーション能力認定協会

コミュニケーション能力とは、自分を取り巻く様々な環境や状況において、自分と関わる他者との関係を良好にする力、または人間関係形成能力といえる。

英語科における「コミュニケーション能力」とは、中学校外国語科の教科目標（指導要領）にもあるように、「単に外国語の文法規則や語彙などについての知識を身に着けさせるだけではなく、実際のコミュニケーションを目的として外国語を運用することができる能力」である。グローバル社会の中で、英語をツールとして異文化、他言語の人々とのコミュニケーションが行えることを目標としている。

小学校では「コミュニケーション能力の素地」、中学校では「コミュニケーション能力の基礎」を養い、高校卒業後には、上に示した「基本の4つの力」をもった「コミュニケーション能力を身につける」ことを目標にして、指導を行いたい。

(2) 大まかな指導の流れ

1学年からの9年間の英語学習では「英語をツールとして使用する」場面を出来るだけ多く設け、実際の外国人とのコミュニケーションに生かせることを目的として学習を進めて行きたい。

【身に付けさせたい英語の力】

- ① 聞くこと,話すこと → 音声によるコミュニケーション能力
(スキット スピーチ 交流学习等)
- ② 読むこと,書くこと → 文字,文章によるコミュニケーション能力
(季節のカード 手紙 電子メールなど)

前期

1～4 学年 英語の持つ独特の音声やリズムに楽しみながら慣れ親しませることにより①を重点的に指導する。



中期

5～7 学年 音声に加えて文字を指導していきながら②の力を伸ばす。



後期

8～9 学年 最終的には4技能（聞く・話す・読む・書く）をバランスよく高める。

2 小学校英語教育について

(1) なぜ小学校での英語教育が必要か？

①英語教育のこれまでの流れについて

1986年(昭和61年)の臨時教育審議会第二次答申に「英語教育の開始時期についても検討する」という文言が入る。それ以降様々な議論が交わされ、1998年(平成10年)には、2002年(平成14年)はから実施される小学校学習指導要領が告示され、新設された「総合的な学習の時間」の中の国際理解教育の一環として「外国語会話」が入る。これにより小学校英語が広まっていった。平成20年度(2008年)の学習指導要領改定を受け、2011年(平成23年)には高学年における外国語活動が完全実施され、現在に至っている。

②小学校英語教育の目的

小学校で外国語活動が行われる理由を小学校学習指導要領から要約した。

p5 3 小学校外国語活動新設の趣旨より

「今回の外国語活動の親切は中央教育審議会から次のように答申されたことを踏まえたものである」

- 急速なグローバル化による国際競争、国際協力に対応した人材育成のため、外国語教育を充実させることが重要な課題の一つ。
- 中学で初めて挨拶や自己紹介などの初歩的な外国語に触れることになるがこれは小学校段階になじむと考えられる。また、中学入学時の英語学習入門期の指導においては「聞く」「話す」に重点を置くこととされつつも「読む」「書く」を含めた4技能を一度に取り扱うことは難しいという指摘がある。そのため小学校段階で外国語に触れたり、体験したりすることで、その後のコミュニケーション能力の育成の素地を作ることが重要となる。
- 総合的な学習の時間での取り組みでは各学校でのばらつきがある。そのため教育の機会均等の確保、中学との円滑な接続等の観点から、国として共通の指導内容を示す。数値による評価にはなじまないものと考え、高学年において一定の授業時数(年間35単位時間、週一コマ相当)を確保する一方、教科とは位置づけない。中学との接続を考え、同様に英語を取り扱うこととする。

小学校外国語活動に期待される効果として、次のようなことが挙げられる。

(期待される効果)

- 異文化・異言語に触れることで世界に興味を持ち、外国語学習への意欲や世界で活躍したいという夢をもつ。
- 異文化・異言語を知ること、日本の文化・言語について再認識をする。
- 楽しい英語活動を体験し、学習意欲を持つことで、中学校英語科での戸惑いが減少する。
- 「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」を目指した活動を行うことで、友達やまわりの人々と関わろうとする力、理解しようとする態度が備わる。

※秋田裕子(2011)『これ一冊でできる 小学校英語活動 基本編』径書房より

中学英語の前倒しではなく、「小学校だからこそ効果がある」ということとしては、小学校学習指導要領のp8第2章 目標及び内容 第1節 外国語活動 1目標で「児童の柔軟な適応力を生かして云々」ということを念頭に目標を設定されている。児童期ならではの利点として、思春期で自意識の高まりを迎える前に慣れておくということがある。失敗を恐れるあまり慣れない音声を発することへの抵抗が少ないうちに英語に触れ、親しむことが出来るのではないかと推測される。

(2) 小学校外国語活動の「成果と課題」

成果	<p>○小学生の 76%が「英語の学習が好き」と回答。</p> <p>○小学生の 91.5%が「英語が使えるようになりたい」と回答。 (文科省：平成 25 年度 全国学習状況調査)</p> <p>○外国語活動導入以前に比べて、中 1 の生徒に「成果や変容がとても見られた」 「まあまあ見られた」と感じる教師が 78%。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外国や異文化に対して興味をもっている。 ・英語の音声に慣れ親しんでいる。 ・英語を使って積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育成されている。 ・中学生の聞く力が高まった。 <p>(文科省：平成 24 年度 小学校外国語活動実施状況調査)</p>
課題	<p>【児童】</p> <p>○小学校高学年は、抽象的な思考力が高まる段階であるにも関わらず、体系的に学習を積んでいないがために、学習内容に飽き足らない児童が見られる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学生の 7 割以上が小学校で「英単語・英語の文を読むこと」、8 割が「英語の単語・文を書くこと」をしておきたかったと回答。 <p>○児童には、自らの考えを英語で表現するための十分な語彙や表現を身に付けることが困難であるが、コミュニケーションに積極的に関わろうとする態度は育ってきている。今後、小学校中学年から学習を開始することに伴い、英語学習への動機付けを更に高め、コミュニケーション能力の素地を養うことで、小学校卒業時までには表現の幅が広がることが期待される。</p> <p>【指導者】</p> <p>○外国語活動の実施に当たっての課題として、「準備や打ちあわせの時間の確保」(51.3%)、「教員の指導力」(44.9%)、「ALT 等の外部人材との打合せ」(30.0%)、外国語活動に関する教員研修(23.8%)が挙げられている。</p>

平成 23 年度に完全実施された外国語活動は、生徒の「意欲」を高める効果があったと思われる。一般的には小学校での大きな目的の一つが「英語を好きになること、興味を持つこと」である。その意味でも大きな成果といえる。ここでの意欲の高まりが、中学校との接続に良い効果を与えているようである。

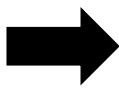
しかし、課題として挙げられている項目は、一教諭のみで解決できる問題ではなく、学校全体の課題として取り組む必要がある。ALT や JTE との授業の打ちあわせの時間設定や TT の計画、JTE の活用方法など職員間の連携や共通理解が必要。また、学級担任以外も含めた全職員で英語指導の研修会を定期的に行うなど、指導者の資質向上を図ることが重要である。このような取り組みが「児童生徒が英語を話したくなる環境づくり」につながる。

課題として挙げられている「体系的な指導の積み上げ」や「文字や語彙の指導」については小学校 1 年生からの積み上げによって解消されていくと考えられる。そのため、より系統性を持った指導計画を作成することが必要になるだろう。

(3) 教科型への移行について

文部科学省は『グローバル化に対応した英語教育改革実施計画』(2013)において平成 32 年には小学校高学年の外国語活動を教科化し、これまでの外国語活動の開始を中学年に引き下げると発表している。教科化した場合、時数は現在の 35 時間程度から 105 時間程度へと増加することになり、これまでの音声中心の「活動型」から文字や文章、語順などの基礎をおさえた「教科型」となる。外国語以外にも、日本人としてのアイデンティティーを高めるため、近現代史や伝統文化についての時数も増加されることになっている。

現行（平成 23 年～）
 時数：35 時間程度
 授業：活動型（音声中心）
 学年：5・6 年生



平成 32 年～
 時数：105 時間程度
 授業：教科型（文字、文章）
 学年：5・6 年生
 外国語活動型は 3・4 年生へ引き下げ

①「英語教育の在り方に関する有識者会議 検討資料」より
 （第 9 回 平成 26 年 9 月 26 日 文科省）
 「小・中・高を通じた目標及び内容のイメージ」という資料の中で新しい学習指導要領における移行のポイントが示されている。

		小学校	
		中学年	高学年
教科等の目標	改善例	外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声等に慣れ親しませながら、 <u>コミュニケーション能力の素地を養う。</u> <ポイント> ・言語や文化についての体験的理解 ・積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度 ・コミュニケーション能力の素地	外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、身近で簡単なことについて外国語の基本的な表現に関わって聞くことや話すことなどの <u>コミュニケーション能力の基礎を養う。</u> <ポイント> ・身近で簡単なこと ・コミュニケーション能力の基礎
	現行	\	外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、 <u>コミュニケーション能力の素地を養う。</u>

②中学校への接続と教科化へ向けて

小学校で外国語活動を経験し、ある程度英語の音声や外国の文化、ALT になれた生徒が中学校に入学してくることは中学校の現場としてはとても楽になる。これは成果と課題の中でもデータとしても見えている。しかし、小学校では音声や体験的な活動が主なため、中学での学習内容とのギャップにより、せっかく前向きだった姿勢が一転、「英語嫌い」をつくることにもなりかねない。実際に「課題」のなかには、「もっと文字の読み書きをやっておけばよかった」という意見が多かった。中学英語で不安を抱える 1 年生たちは文字指導の壁に苦しんでいる。

ここでは従来の外国語活動において敬遠されがちであった「文字指導」の効果的な取り組みと数年後に迫った「教科化」へのスムーズな移行の方法について考えていきたい。

③小学校における指導の工夫

高学年の教科化に向けて、小学校 4 年生の後半までにアルファベットの大文字・小文字が読み書き出来ることを目標に取り組みたい。現行の小学校学習指導要領では 3 学年でローマ字を学習することになっている。そこで学ばれる内容は、中学校英語科の内容と大きく異なる部分もあるので、学校全体として「ヘボン式」を主として採用し、表記の方法も英語のルールに則った形で指導していきたい。（但し、従来の訓令式もワープロのタイピングとして指導するか他教諭らと検討する）

【段階別の活動内容と目標】

学年	活動内容	目標
1,2 学年	イラストや写真に大文字や小文字を表記するなど、音声と同時に文字も示す。 パズルゲームなどを用いる。	大・小文字の名前読みが出来る。
3,4 学年	国語でローマ字を行う前に基本のフォニックスと共に導入し、五十音を練習する。実際に使われている地名などのローマ字表記を読んでみる。	名前を書ける。大・小文字を使って県名や身近な地域をローマ字表記できる。
5,6 学年	2～3表の英文を読み、理解する。第1,2文型を読む・書く。日本語との語順の違いに気づかせる。	自己紹介などの短い文を読める、書ける。基本的な単語（月、曜日など）読める、書ける。

各学年またはブロックごとに「覚えたい語句」を設定し、表示するなど掲示物の工夫も必要となる。語句のつづりを繰り返し「書いて」覚えるだけでなく、イラストや音声などと共に、繰り返し「聞いて」「見て」覚えるようにし、中学に上がった段階で、生徒が「知っている単語や見たことがある単語が多い」という印象を持って学習に向かえるように取り組みたい。

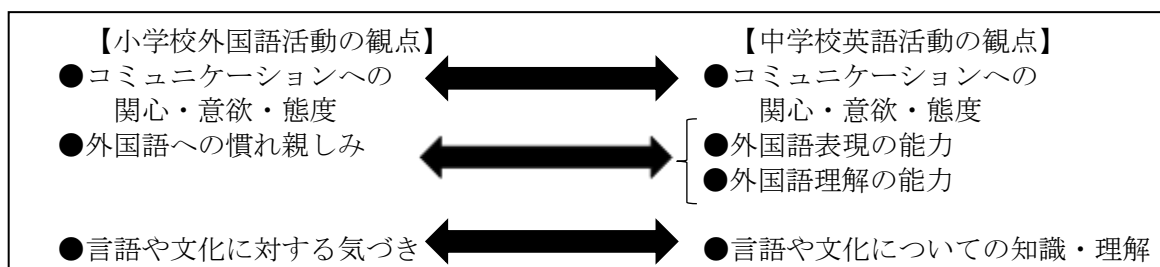
(4) 評価について

①基本的な考え方

ア 評価については小学校外国語活動の目標である3つの柱を基に文章記述で行う。

イ 評価については中学校との接続が必要となる。

文部科学省が示した評価の観点、下図に示す通り新学習指導要領の中学校「外国語科」の評価の観点とつながっている。 名護市立教育研究所 研究報告書第36号より



ウ 特に関心・意欲・態度を重視する。

エ 多様な評価方法を用いる。

- ・観察（児童の様子を教師が観察して評価する）
- ・面接（英語でのインタビューでの反応を見て評価する）
- ・振り返りカードの活用（児童に自己評価させ、気づきを拾う）
- ・ペーパーテスト（主に5・6年生）ローマ字やアルファベットなど、学習した内容の確認。
- ・客観テスト（英語検定等）

② 評価の観点及びその趣旨

観点	コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	外国語への慣れ親しみ	言語や文化に対する気づき
趣 旨	コミュニケーションに関心をもち、積極的にコミュニケーションを図ろうとする。	活動で用いている外国語を聞いたり話したりしながら、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しんでいる。	外国語を用いた体験的なコミュニケーション活動を通して、言葉の面白さや豊かさ、多様なものの見方や考え方があることなどに気づいている。

「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について」（平成22年5月11日付け文部科学省初等中等教育局長通知）より

3. 中学校英語教育について

(1) 中学校外国語科の課題

平成20年度から現行の学習指導要領が実施された。下記の資料から、現状の課題としては「コミュニケーション能力の質の向上」が考えられる。「自分の考えを英語で表現する」というものから相手の意見に対応して「考えながら英語で表現する」能力が求められるようになってきた。

英語教育の在り方に関する有識者会議（第5回 H26.6.18）より

平木（2014）の資料を基に再構成した。

① 現行の学習指導要領の主なポイント

<ul style="list-style-type: none"> ○目標：4技能の総合的な育成 ・授業時数：105時間 → 140時間（週4コマ相当） ・指導する語数：「900語程度まで」→「1200語程度」 ・言語活動の充実：各領域で1項目追加・教材の題材の例：「伝統文化」「自然科学」を追加 		
<ul style="list-style-type: none"> ・各学年の指導上の配慮事項 <p><u>第1学年</u></p> <p>小学校外国語活動で育成された素地を踏まえた指導</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションに対する積極的な態度 等 		
<ul style="list-style-type: none"> ・授業改善のポイント <p><キーワード></p> <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 50%;"> <ul style="list-style-type: none"> ・文法はコミュニケーションの支え ・言語活動との一体化 </td> <td style="width: 50%;"> <ul style="list-style-type: none"> ・4領域を統合した（関連付けた）言語活動 ・4技能の総合的な（バランスよい）育成 </td> </tr> </table> <p>・活用することを通して定着を図る</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・文法はコミュニケーションの支え ・言語活動との一体化 	<ul style="list-style-type: none"> ・4領域を統合した（関連付けた）言語活動 ・4技能の総合的な（バランスよい）育成
<ul style="list-style-type: none"> ・文法はコミュニケーションの支え ・言語活動との一体化 	<ul style="list-style-type: none"> ・4領域を統合した（関連付けた）言語活動 ・4技能の総合的な（バランスよい）育成 	

② 成果と課題

<状況調査等の結果から>

各領域の課題

<ul style="list-style-type: none"> ○聞くこと ・文形式ではなく内容に応じて応えること ・多くの情報を整理して理解すること 	<ul style="list-style-type: none"> ○話すこと ・自分の考えや気持ちなどが聞き手に伝わるように話すこと
<ul style="list-style-type: none"> ○読むこと ・いくつかの情報を整理して正確に内容を読み取る 	<ul style="list-style-type: none"> ○書くこと ・単語の意味や働きから単語間の結びつきを理解し、適切な語順で文を書くこと ・まとまった内容の文章を書くこと

できていること	課題と考えられること
<ul style="list-style-type: none"> ・教師と生徒の親和関係 ・授業を英語で展開 ・ペアワークなど「活動中心」（表面上...） <p style="text-align: center;">↑</p> <p style="text-align: center;">外国語活動の成果か？</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・真の「コミュニケーション」となっているか？ ・考えながら「表現」できているか？ ・教科書本文（内容）の扱いについてどうなっているか？ ・単元ゴール（付けたい力）が設定されているか？ <p style="text-align: center;">↑</p> <p style="text-align: center;">どんな「コミュニケーション能力」？</p>

①教員の英語使用 ※発話の半分以上が英語	②生徒の英語による言語活動 ※発話の半分以上が英語	③CAN-DO リストの形での 到達目標設定
1年 44.5% (7,133人 / 16,027人) 2年 42.9% (6,579人 / 15,756人) 3年 41.2% (6,570人 / 15,933人)	1年 52.5% (8,415人 / 16,027人) 2年 47.0% (7,407人 / 15,756人) 3年 43.1% (6,875人 / 15,933人)	17.4%(1,681校 / 9,653校) 達成状況を把握 ※設定している学校のうち 66.8%(1,123校 / 1,681校)

(2) 今後の方向性

①『グローバル化に対応した英語教育改革実施計画』文科省 2013 で示された内容は以下のとおりである。

現在の学習指導要領における英語教育

○4 技能の総合的育成

○目標：コミュニケーション能力の基礎を養う

例) ある程度の長さの物語を読んで、登場人物の行動や話の流れなど、あらすじを読み取ったり、その内容を簡単な言葉で伝えたりすることができる。

CEFR A1 程度 (英検 3 級程度等) 【週 4 コマ】

新たな英語教育



○授業は英語で行うことを基本とし、内容に踏み込んだ言語活動を重視

○目標：身近な事柄を中心に、コミュニケーションを図ることができる能力を養う

例) 短い新聞記事を読んだり、テレビのニュースを見たりして、その概要を伝えることができる。

CEFR A1～A2 程度 (英検 3 級～準 2 級程度等) 【週 4 コマ】

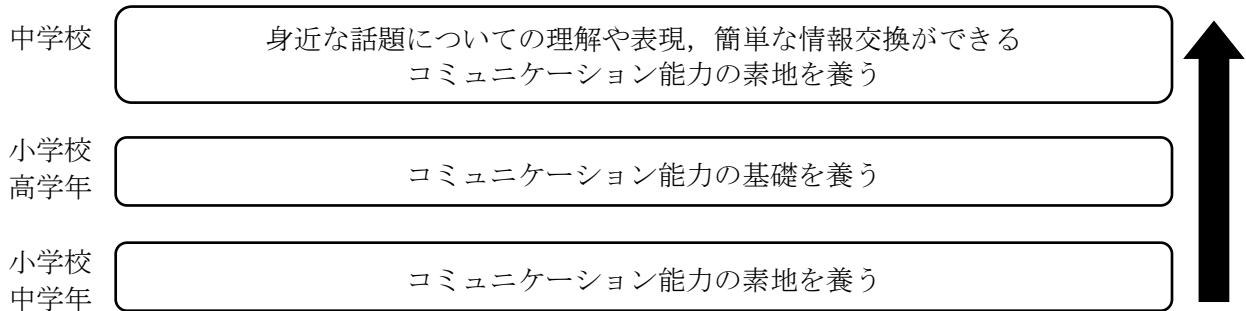
②「英語教育の在り方に関する有識者会議 検討資料」で示された内容 (第 9 回 平成 26 年 9 月 26 日 文科省)

「小・中・高を通じた目標及び内容のイメージ」という資料の中で新しい学習指導要領における移行のポイントが示されている。

		中学校
教科等の目標	改善例	外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図るとともに、 <u>身近な話題についての理解や表現、簡単な情報交換ができるコミュニケーション能力を養う。</u> <ポイント> ・身近な話題 ・理解、表現、情報交換できるコミュニケーション能力
	現行	外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

小学校高学年での外国語活動の教科化に伴い、目標も繰り上げられている。「コミュニケーション能力の素地を養う」という文言は小学 3,4 年生へと移り、「コミュニケーション能力の基礎を養う」という文言は中学から小学 5,6 年生へと移されている。

中学校においては「身近な話題についての理解や表現，簡単な情報交換ができるコミュニケーション能力を養う」という、文言に変わり、より具体的で質の高い力が求められることとなる。



(3) 効果的な小中接続の方法について

①中学校側から見た小学校外国語活動のメリット・デメリット

メリット

- ・あいさつの仕方を理解しており，きちんと出来ている。
- ・数字、曜日、天気、月を言える。(知っている語彙の量が多い)
- ・簡単な会話を知っているため，最初から Q&A 活動を行うことができる。
- ・ALT が指導していた小学校の場合は発音をネイティブらしく発音させても抵抗なく発音する。
- ・授業で英語を使用するグループ活動に意欲的に参加できる。
- ・英語の指示を理解できることが多い。(特に ALT がメインで指導した小学校)
- ・小学校で ALT と接してきた生徒たちは，ALT との接し方に慣れている。
- ・外国語活動を経験してきたので，中学校の英語授業に抵抗感が少ない。

デメリット

- ・英語授業に対する新鮮味が無いので，ワクワクドキドキ感がない。
- ・中学校で授業を始める前から英語嫌いがいる。
- ・ゲームなど楽しい活動をしてきたので，勉強としての英語授業には抵抗がある。
- ・小学校時代に間違えて覚えてきたことが，なかなか直らないことがある。

『成功する小中連携 生徒を英語好きにする入門期の活動 5 5』 p7
大塚謙二 著 胡子美由紀 著 (明治図書) より

② 小学校外国語活動と中学校英語の比較

目標	小	英語に具体的に触れることでよい。語学の時間ではない。英語の技能は副次的産物。コミュニケーション能力の素地を養う。
	中	語学としてのコミュニケーション能力（技能）を身に着ける。コミュニケーション能力の基礎を養う。
四技能	小	聞く,話す为中心で,習熟を求めない。
	中	聞く,話すに加え,読む,書くも含めて習熟させる。
発音	小	怪しくても矯正練習などをすると萎縮して話さなくなるのではない。
	中	英語として通用する正しい発音を身につけさせるために練習が必要。
学習・活動内容	小	ゲームや活動が中心で,英語体験を重視する。文法操作練習は行わない。発話は自分のことが中心。特定の場面での言い方しかできないので応用が利かない。客観的情報の報告(三人称)活動などは行わない
	中	語学教育として行う。自分,相手,第三者の事も含めて表現できる。「無限の文を作成できる」用になる基礎を築く。文法を基礎として習熟するためにはある程度退屈で苦役的活動を伴うことがある。評価がある。
シラバス	小	基本的に場面シラバス。この中に機能シラバスを織り込んである。
	中	文法シラバスを中心に機能シラバスを配置し,場面設定して埋め込んでいる。

『成功する小中連携 生徒を英語好きにする入門期の活動 5 5』 p15
大塚謙二 著 胡子美由紀 (2012) より抜粋

③小学校外国語活動を踏まえた中学校での英語指導

<p>※中学校 1 年の指導の留意点</p> <p>ア ゲーム、歌、チャンツなどを用いた言語活動の継続（1 学期）。</p> <p>イ 『 Hi, friends ! 』の指導内容と中学校教科書との共通点を把握し、小学校の復習と同時に中学校での導入に活用する。（小学校で学んだ内容を思い出させる）</p> <p>ウ 文字と音声指導の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フォニックスの指導を行い、文字の学習への意向をスムーズにする。 ・ローマ字との共通点と違いについて気づかせる。 <p>エ 指示や挨拶を英語で行い、日本語の使用を控え、なるべく英語で授業を進める。</p> <p>オ 意味を理解させ、英文を丸ごと覚えて、器ができてから、文法知識を注ぎ込む。</p> <p style="text-align: right;">大塚・胡子（2012）を参考に作成</p>
--

④評価における留意点

7 学年（中 1）においては、小学校との接続をふまえて指導にあたると共に、評価についても以下の点に留意したい。

- ・ 1 学期は「書くこと」による評価よりも、「目標文の意味を理解し,英文を丸ごと覚えて表現できる」という点に重点をおく。
- ・ 活動に参加できたことを大きく評価するため、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」の割合を高める。

(4) 課題の解決を目指した取り組み例

- ・ 基本的に授業は英語で行う。
- ・ 「考えながら話す」ことを目標に,スピーチに加え、その内容に対する英問英答を加える。
- ・ 他言語の人々との交流の中で,沈黙を作らずに会話ができるよう、相槌や話題の切り出し方などを日ごろの言語活動に取り入れる。
- ・ 教科書の英文を英語で要約する練習を重ねることから始め,短文の英語のニュース記事などを平易な英文で要約できるように練習する。

4. ICT活用について

(1) ICT 機器活用の意義, 必要性について

ICT を活用した教育の推進に関する懇談会 報告書 (中間まとめ) 文部科学省 より再構成

① 国の方針等

2011 (平成 23) 年 4 月, 文部科学省は「教育の情報化ビジョン」において「主要能力 (キーコンピテンシー) における「社会・文化的, 技術的ツールを相互作用的に活用する能力」の中には「知識や情報を活用する能力」や「テクノロジーを活用する能力」が含まれている」とし, 21 世紀を生きる子どもたちに ICT 活用能力を求めている。

さらに, ①情報活用能力の育成, ②教科指導における情報通信技術 (ICT) の活用, ③校務の情報化の 3 つの側面を通して教育の質の向上を目指すことを明らかにした。

この間文部科学省では実証事業である「学びのイノベーション事業」などを進める一方で 2013 (平成 25) 年 6 月には, 「日本再興戦略」や「世界最先端 IT 国家宣言」, を国家戦略として閣議決定。さらに「第二期教育振興基本計画」(平成 25 年 6 月閣議決定) においても ICT を活用した教育の推進を掲げている。

第 2 期教育振興基本計画で目標とされている水準 (平成 26 年度～29 年度)

- 教育用コンピュータ 1 台当たりの児童生徒数 3.6 人
 - ①コンピュータ教室 40 台
 - ②各普通教室 1 台、特別教室 6 台
 - ③設置場所を設定しない可動式コンピュータ 40 台
- 電子黒板・実物投影機の整備 (1 学級当たり 1 台)
- 超高速インターネット接続率及び無線 LAN 整備率 100%
- 校務用コンピュータ 教員一人一台

※文科省『教育の IT 化に向けた環境整備 4 か年計画』パンフレットを参考に再構成

②現行の学習指導要領 (平成 20 年度施行) での ICT 教育の位置づけ

各教科の指導にあたっては、児童がコンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段に慣れ親しみ、コンピュータで文字を積入力するなどの基本的な操作や情報モラルを身に付け適切に活用できるようにするための学習活動を充実するとともに、これらの情報手段に加視聴覚機材や情報機器などの教材・教具の適切な活用を図ること。

小学校学習指導要領総則 第 1 章第 4 の 2 (9)

各教科の指導にあたっては、生徒が情報モラルを身に付け、コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を適切かつ主体的、積極的に活用できるようにするための学習活動を充実するとともに、これらの情報手段に加視聴覚機材や情報機器などの教材・教具の適切な活用を図ること。

中学校学習指導要領総則 第 1 章第 4 の 2 (10)

③ICTの特長

「ICTを活用した教育の推進に関する懇談会 報告書（中間まとめ）」文部科学省 より再構成

- ① 時間や空間を問わずに、音声・画像・データ等を蓄積・送受信できるという、時間的・空間的制約を越えること。
- ② 距離に関わり無く相互に情報の発信・受信のやり取りができるという、双方向性を有すること。
- ③ 多様で大量の情報を収集・編集・共有・分析・表示することなどができ、カスタマイズが容易であること。

このようなICTの特徴を生かすことにより、これまで実現しなかった学習場面が容易になるケースが生まれ、一斉学習、個別学習及び協働学習を効果的に行うことができるようになる。

④ICTの活用により容易となる学習場面の例

- ① 距離や時間を問わずに児童生徒の施行の過程や結果を可視化すること
【思考の可視化】
- ② 教室やグループでの多くの意見や考えを、距離を問わずに瞬時に共有すること
【瞬時の共有化】
- ③ 観察・調査したデータなどを入力し、図やグラフ等を作成するなどを繰り返し行い
試行錯誤すること 【試行の繰り返し】

⑤教育においてICTを活用する意義

- ・ 問題解決に向けた主体的・協働的・探求的な学びを実現できる点
- ・ 個々の能力や特性に応じた学びを実現できる点
- ・ 離島や過疎地等の地理的環境に左右されずに教育の質を確保できる点

(2) 英語科におけるICT活用の利点と実践事例

ICTの特性を踏まえた上で、英語科での活用の利点と、小学校、中学校のそれぞれの実践例をまとめてみた。

① 英語教育におけるICT活用の利点


- ア. 英語に対する興味関心を高める
 - ・ 動的、インタラクティブなコンテンツの提供
 - ・ 一人一人の能力や特性に応じた学びが可能
- イ. 学習効果を高める
 - ・ Native音声による教材
 - ・ コミュニケーションツール等の活用により他地域・海外との交流学习
- ウ. 進捗確認/課題発見に役立つ
 - ・ デジタルなログ管理
 - ・ 家庭学習、他学校等との連携

『英語教育におけるICTの活用』 2014年5月21日 文部科学省 国際教育課 より抜粋



②ICT を活用した英語授業の実践事例

『教育 ICT 活用事例集』（一般財団法人 日本視聴覚教育協会）より抜粋 P46 P47

実践例①

学校名	葛飾区立本田小学校	使用する機器, 教材など
学年	第5学年	デジタル教科書
ねらい	デジタル教科書の教材を使い発音の練習を行う	一人一台のタブレット
授業の タイトル	Alphabet, vegetables, gestures	ヘッドフォン・マイク
学習場面	個別学習	
	<p>学習者用デジタル教科書・教材を使って、ネイティブの英語の発音を映像で観察したり、波形表示機能を使って自分の発音との違いを比較することにより、発音練習に恥ずかしがらないで意欲的に取り組み、英語に慣れ親しむことができた。</p> <p>発音に慣れてきたら、さらにペアで発音を確認し合ったり、ロールプレイングで簡単な会話を行うなど、より実践的な外国語活動へと発展させることができる。</p>	

実践例②

学校名	和歌山市立城東中学校	使用する機器, 教材など
学年	第3学年	テレビ会議システム
ねらい	テレビ会議システムを使い海外と英語で交流	プロジェクター
授業の タイトル	Multi+1 文化紹介	スクリーン
学習場面	協働学習 遠隔地の学校との交流学习	集音マイク
効果 (成果)	<p>テレビ会議システムを用いて、シンガポールの学校と英語で交流を行った。グループごとに日本文化について発表資料をまとめ、英語で紹介することを通じて、情報を主体的に収集・発信する能力と英語によるコミュニケーション能力を育成することができた。</p> <p>シンガポールの生徒からも現地の生活について発表してもらうことで、映像と英語を通して互いに国の文化を交流できた。</p>	<p>Wakayama oranges umeboshi (pickled plums)</p>  

5. 屋我地小中一貫教育校の「英語教育」に向けて

(1) 本校の教育目標

自ら学び つながり 未来を拓く屋我地っ子

社会のグローバル化に伴い、様々な文化や価値観、言語に触れる中で生活していく力を、生徒たちには能動的・協働的学びを通して身に付けさせる必要がある。クラスの仲間や教師、地域、さらには海外の方々との関わりの中でコミュニケーション能力を高め、自分の将来を切り拓くことのできる生徒の育成を目指す。

(2) 指導計画作成の基本方針

- ・「名護市小中一貫教育校市民懇話会」の提言を踏まえる。
- ・義務教育9年間の系統性を踏まえるとともに、学年区分「前期・中期・後期」の特色を生かした編成をする。(学年区分ごとのねらい、到達目標、指導の重点、評価基準等を設定する。)
- ・地域の自然や歴史・文化、地域の人材や関係機関などの資源を生かした編成を行う。
- ・コミュニケーション能力を育む観点から、言語活動を充実させる。
- ・英語活用能力育成のために、子どもの音声に対する鋭い感受性と、子ども特有の柔軟性に着目し、教育課程特例校制度を導入した小学校1年生からの段階的・系統的な指導を行う。
- ・英語学習の効果を高めると共に、発信力の養成を図るため、ICT機器の活用を推進する。

(3) 9年間の英語の目標

- ・英語を使い、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。
- ・相手の意向を理解し、自分の意見や考えを発信できる態度・能力を養う。
- ・9年間の英語教育を通して自国や他国の言語や文化について理解を深める。

(4) 学年区分別のねらいと到達目標

【基礎・基本期】 前期 (1,2,3,4年生)	➡	【充実期】 中期 (5,6,7年生)	➡	【発展期】 後期 (8,9年生)
英語に慣れ親しむ【知る】		英語を身に付ける【使う】		英語を活用する【発信する】
<ul style="list-style-type: none"> ○歌やダンス、遊びなどを通して英語特有の音声やリズムに慣れる。 ○間違いを怖れず進んで英語を使いコミュニケーションを楽しむ。 ○外国人と自然に接する。 ○ゲームなどを通して英語を聞いたり話したりする活動に慣れ親しむ。 ○ローマ字を読んだり、書いたりする。 ○外国の生活や文化に興味を持つ。 		<ul style="list-style-type: none"> ○身近なことについて、簡単な英語やジェスチャーを使ってやり取りが出来る。 ○文字と音声を関連付けて読める。 ○簡単な英語を聞いて内容を理解する。 ○簡単な英語を使って身近なことについて書ける。 ○外国や日本の生活や文化を理解する。 ○外国の人と交流する。 		<ul style="list-style-type: none"> ○まとまりのある英語を聞いて要点を聞き取る。 ○自身の考えや気持ちをまとまりのある英語で話す。 ○物語や手紙など、まとまりのある英語の文を読み、理解できる。 ○単語のつづりや語順に気をつけて、まとまった英語の文が書ける。 ○外国や日本の生活・文化への理解を深める。 ○外国の人と交流する。 ○学校HPの英語版を作成。



(5) 指導の重点

前期 (1,2,3,4年生)	中期 (5,6,7年生)	後期 (8,9年生)
<p>○英語の歌やチャンツなどを通して英語を聞いて真似る活動に取り組む。</p> <p>○ゲームなどの活動を通して、楽しみながら「聞くこと」「話すこと」に慣れさせる。</p> <p>○ローマ字の「読み」「書き」に取り組む。</p>	<p>○英語を「聞くこと」「話すこと」の活動を充実させる。</p> <p>○基本的なフォニックスの指導を行う。</p> <p>○アルファベットを「読むこと」「書くこと」の活動に取り組む。</p> <p>○日本語との違い（語順）に気づかせながら文法を徐々に指導していく。</p>	<p>○「聞くこと」「話すこと」を重視した活動を取り入れ、活用する力を高める。</p> <p>○自分や考えを英語で話したり、書いたりする表現活動に取り組む。</p> <p>○海外との交流や外国の文化を学ぶ中で英語を使用するモチベーションを高める。</p>

(6) 指導の方針

① 英語活動の授業時数

小学校 1・2年生 34 時間, 3・4年生 35 時間, 5・6年生 55 時間を実施する。

② 英語活動に充てる時数

- ・ 1,2 学年 (34 時間) : 生活 (10 時間) 音楽 (7 時間) 図画工作 (7 時間) 体育 (10 時間)
 - ・ 3,4 学年 (35 時間) : 総合的な学習の時間 (20 時間) 音楽 (4 時間)
図画工作 (4 時間) 体育 (7 時間)
 - ・ 5,6 学年 (55 時間) : 総合的な学習の時間 (20 時間) 外国語活動 35 時間
- ※各教科と英語活動の内容を関連付けながら、弾力的な運用を行う。

③ 文字指導について (詳細はⅢ 2 (3) で説明)

ア 中学校への接続をよりスムーズに行うため小学校での文字指導を以下の通り実施する。

ローマ字

- ・ 基本的に小学校 3 学年の国語科で扱うが、英語活動でも取り組む。
- ・ 小学校 3・4 学年の 2 年間で「読み」「書き」ができることを目標とする。
- ・ 「ヘボン式」を基本として指導する。

アルファベット

- ・ より自然な英語に触れさせるため、1 学年の英語活動時から写真やイラストに併記したり、校舎内の掲示物や教室表示に使ったりと、視覚的に捉えさせる。
- ・ 小学校 1・2 学年の 2 年間でアルファベットの大・小文字の名前読みができることを目標とする。
- ・ 小学校 5・6 学年の 2 年間で「読み」「書き」ができることを目標とする。
- ・ 基本的なフォニックスの指導を行い、音声と文字を関連付けながら指導する。

イ 平成 28 年度本校小学校英語活動年間指導計画をもとに指導を行う。

ウ 「Hi, friends!」(文部科学省発行) を効果的に活用する。

(7) 指導体制

① TT (ティームティーチング)

基本的に小学校 1~4 年生までは学級担任と英語指導員 (ALT・JTE), 小学校 5・6 年生の英語活動は中学校英語担当者と英語指導員との TT で行う。

② 英語指導員 (ALT: 外国人指導助手・JTE: 日本人英語教師) の配置

主に小学校で JTE(Japanese Teacher of English), 中学校 ALT(Assistant of Language Teacher) を活用する。但し, 授業の内容や行事に合わせ, 柔軟に組み合わせを変更する。

学年	職員の組み合わせと指導体制
小学校 1~4 年生	学級担任と英語指導員(ALT または JTE)による TT
小学校 5・6 年生	【教科担任制】 中学校英語担当者と英語指導員(ALT または JTE)による TT

○英語指導員の授業実施時数（案）

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	7年生	8年生	9年生
ALT との TT	9	9	10	10	40	40	105	105	105
JTE との TT	25	25	25	25	15	15	35	35	35
総授業時数	34		35		55		140		

③全教師と中学校英語担当者の主な役割

全教師

- ・英語活動で学習した英語表現や単語については、他の学習や場面でも使用するよう心がける。
- ・英語に関するイラストや掲示物を作成するなど、教室環境を整える。
- ・英語活動では教師自ら英語を使い児童生徒のモデルになる。

中学校英語担当者

- ・小学校1年生から6年生までの英語活動の内容を把握し、系統的な指導と授業への助言を行う。
- ・中学校への接続を意識しながら5・6年生での英語活動を充実させる。
- ・英語コーディネーターとして主の役割を担う。

○9年間を通し一貫性のある指導を行うことが大切。

○英語力の向上と指導力の向上を目的に英語研修を実施。（※校内研との関連）

④英語指導員の効果的な活用

ALT の活用

- ・教科担当者との TT
- ・教材・教具の作成（教科担当者と連携）
- ・英語ストーリーテリングコンテストや英語弁論大会などへの取り組み
- ・英語検定の取り組み
- ・清掃、給食（全学年をローテーション）
- ・英語の絵本の読み聞かせなど
- ・各行事への参加

JTE の活用

- ・教科担当者との TT
（1年生～4年生の英語活動を主として指導する）
- ・教材・教具の作成（教科担当者と連携）
- ・小学校3年生のローマ字指導
（国語科と連携）
- ・小5・6年生のアルファベット指導
（教科担任、学級担任と連携）
- ・清掃、給食（全学年をローテーション）
- ・その他の活動への参加
- ・英語コーディネーターとしての役割を担い、学級担任を補佐する。
- ・英語表示などの掲示物の計画、作成を主導する。

○学校生活全般を通して子どもたちと関わることで、英語を使う場面を学校生活の中で多く作ることが大切。「英語で話しかけ、英語で答えさせる」事を繰り返す。

⑤学習環境の工夫

英語の習得にはその環境が大きな要因となる。

全職員、保護者を巻き込み、環境を作る。

【取り組み例】

- ・異年齢交流による指導を行う。学年を超えたつながりを作りながら、上級生への尊敬や憧れを持つことで学習効果を高める。
- ・全職員が意識的に英語を使う場面を設定。
- ・校内における英語の表示、掲示物を作成
- ・校内放送の活用（朝の活動、お昼の放送）
（例：お昼の放送に英語データを設定、朝あいさつの放送を英語で実施）
- ・各種検定の活用
（児童英検、英語検定等）
- ・関連機関との連携強化
（名桜大学、沖縄工業専門高等学校などからの出前授業、派遣講師による研修等）
- ・学校行事の設定
（英語スキットコンテスト、英語劇 全体朝会を英語で行うなど）
- ・各種研修（小学校外国語活動など）への積極的な参加。

（８）評価について

①各学年区分の到達目標及び小学校外国語活動、中学校外国語の評価の観点に基づき評価する。

②通知表、指導要録への記入について

学年	通知表	指導要録
1~4 学年	年度末に文章で記述	総合所見欄に文章で記述
5,6 学年	学期ごとに観点別評価（◎○△）とコメントを記入	外国語活動の記録に年間のまとめを記入（観点別評価とコメント）
7~9 学年	従来通り：観点別評価（ABC）と素点、評定を学期ごとに記入	従来通り：観点別評価（ABC）と評定を記入

③留意点

評価規準に基づき評価する。小学校 5,6 年生では、教科化への移行と、より効果的な中学校への接続を考慮し、他教科と同様に学期別に観点別評価の記入を行う。中学校 1 年（7 年生）においては、小・中接続時の特性を踏まえ、活動に参加できたことを大きく評価するため、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」の割合を高める。

④小中一貫校としての課題

本校の 9 年間を通じた指導では、緩やかで系統的な計画の下に英語学習が行えるという大きな利点がある。高学年での教科型への移行、それに伴う中学年での外国語活動の実施に向け、その利点を生かすためには学年区分とは別の 5 段階（小学校低学年、中学年、高学年、中学 1 年、そして中学 2・3 年）の指導及び評価計画の作成が今後の課題となる

IV 研究の成果と課題

本研究では、「コミュニケーション能力を育む小中一貫英語教育」をテーマに9年間を見通した指導計画の作成を行った。その成果と課題を次に述べる。

成果としては次の3点である。第1に、小中一貫校における英語教育のあり方について理解を深めることができたこと。第2に、9年間を見通した系統性のある指導計画を作成することができたこと。第3に、学年区分ごとの評価規準を作成することができたことである。

文部科学省の施策や文献、先進校の実践例を参照し、小学校で英語を学ぶ意義や目的、そして中学校英語との違いなどを知ることで、指導計画を作成するための手立てを学ぶことができた。さらに小学校外国語活動の課題を踏まえ、小学校での学びをより効果的に中学校へつなぐため、小学校のそれぞれの段階に応じた文字指導の内容と目標を示した。9年間の学びをつなぎ、滑らかで実践的な指導を行うため、3つの学年区分ごとに指導目標、評価規準を設定し、児童生徒を段階的に支援することができるようにした。

課題としては次の3点である。第1に、今回作成した指導計画、および評価計画を工夫・改善していくための手立て。第2に、今回示すことができなかった各学年の単元指導計画の作成。第3に、授業におけるICT機器使用の工夫である。

今回作成した指導計画は完成されたものではなく、新学習指導要領の改訂を鑑みて変更や改善を加え移行していくことになる。また、系統性のある計画にするためにも、これから数年は毎年内容の変更が必要になるため、担当する教師は児童生徒の実態を把握し計画に反映させていかなければならない。各学年の単元指導計画は、次年度以降の小学校における時数の設定と今年度の指導の状況を踏まえ、本校の児童生徒の実態に合わせた授業計画作成を行いたいと考えている。社会的な変化に対応し情報を使いこなすことができる力をつける方法の一つとして、児童生徒が興味関心を持ち、意欲的に調べ学習や発表を行えるように、ICT機器の効果的な使用についても実践しながら研究を進めていきたい。

V 研究を振り返って

早期英語教育について、その是非について考えたことはあったが、自分自身がそのカリキュラム作成に関わることになるとは考えたこともなかった。中学校教諭を20年間務めてきた私にとって小学校での英語指導は全くの未経験分野であるため、この半年間は「小学校の先生はすごい」と感心させられることが多かった。小学校での授業を3回見せていただいたが、6年生の授業では英語専門ではない学級担任とALTが見事な連携で授業を行っており、別の小学校で行われた1年生と5年生の授業は、両方もほぼオールイングリッシュであった。私たち中学校英語教師にも大いに参考になるものだった。

様々な実践を実際に目にし、さらに文献などを通じて多くの情報に触れることができたことは、自分にとって大きな財産となった。これまでじっくりと目を通すことができなかった文部科学省の施策についても時間をかけて読むことができ、今後の英語教育の方向性を知ることができた。少し残念に感じていることは、もっと多くの授業を見たかったということ。今後はこれまで以上に積極的に実践発表や研修に足を運びたい。教師としての基本に戻れたと感じている。

研究所では恵まれた環境で研究を進めることができた。このような機会を与えてくださった屋我地中学校の校長先生並びに先生方に感謝したい。そして拙い私の研究に、所長をはじめ学校特任アドバイザー及び学校教育課の先生方からはたくさんのおアドバイスや温かい励ましの言葉をかけていただき、深く感謝している。

今回作成した指導計画を学校現場に持ち帰り、実践をしながら修正を重ね、より充実した指導計画となるよう心がけていきたい。自ら学び つながり 未来を拓く屋我地っ子の育成を目指して。

<引用・参考文献>

- 秋田裕子(2011) これ一冊でできる 小学校英語活動 基本編 径書房
- 大塚謙二 著 胡子美由紀 著(2012)成功する小中連携 生徒を英語好きにする入門期の活動 5 5p7 (明治図書)
- 一般財団法人 日本視聴覚教育協会(2012) 教育 ICT 活用事例集
- 宜野湾市教育委員会(2009) 宜野湾市小学校英語実践指導の手引き
- 熊本大学教育学部附属小学校 著(2005) 小学校 3 6 5 日の授業際案明治図書
- 小中一貫教育基本構想検討委員会(2006) 宇治市における小中一貫教育の方向性
- D-project 編集委員会(2014) つなぐ・かかわる・授業づくりタブレット端末を活かす実践 52 事例学研
- 直山木綿子 編(2014) 小学校外国語活動のツボ 教育出版
- 中川一史 監修(2011) ICT 教育 100 の実践・事例集 フォーラム A
- 名護市教育研究所(2010) 3 6 号 研究報告書
- 名護市小中一貫教育推進市民懇話会 (2014)屋我地地域における小中一貫教育の在り方について (提言) ~屋我地地域における小中一貫教育校の開校に向けて~
- 日本コミュニケーション能力検定協会ホームページ
<http://www.ca-japan.org/about.html?gnavi>
- 平木 (2014) の資料英語教育の在り方に関する有識者会議 (第 5 回 H26.6.18) より
- 松川禮子・大下邦幸 編著(2007) 小学校英語と中学校英語を結ぶ一英語教育による小中連携— 高陵社書店
- 松川禮子 監 樋田光代 著(2008) 小学校英語ホップ・ステップ・中学 文溪堂
- 文部科学省 (2003)「英語が使える日本人」の育成のための行動計画
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryoy/04031601/005.pdf
- 文部科学省(2008a)小学校学習指導要領
- 文部科学省(2008b)中学校学習指導要領
- 文部科学省(2010)小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について (平成 2 2 年 5 月 1 1 日付け初等中等教育局長通知)
- 文部科学省(2011) 国際共通語としての英語力向上のための 5 つの提言と具体的施策
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/07/13/1308401_1.pdf
- 文部科学省(2013)グローバル化に対応した英語教育改革実施計画
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2014/01/31/1343704_01.pdf
- 文部科学省(2014a) 英語教育の在り方に関する有識者会議 検討資料
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/shiryoy/1352268.htm
- 文部科学省(2014b)英語教育における ICT の活用
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/shiryoy/_icsFiles/afieldfile/2014/06/26/1348388_06.pdf
- 文部科学省(2014c)ICT を活用した教育の推進に関する懇談会 報告書 (中間まとめ)
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/08/_icsFiles/afieldfile/2014/09/01/1351684_01_1.pdf